

「北の大地を育んだ川との共生 治水と利水の技術史Ⅱ 第二部 利水編」

講師のご紹介

〈基調講演〉流域治水と河川環境の整備と保全 ～ 気候変動下におけるグリーンインフラの役割 ～



中村 太士 (ナカムラ フトシ)

1958年愛知県名古屋市生まれ。2000年北海道大学大学院教授。1990年から92年までアメリカのオレゴン州立大学で生態系管理学を学ぶ。森林と川をつながりなど、生態系間の相互作用を土地利用も含めて流域の視点から研究している。2005年日本森林学会賞、2009年生態学琵琶湖賞、2011年尾瀬賞、2012年みどりの学術賞、2013年北海道大学研究総長賞、2017年日本農学賞、読売農学賞、2018年北海道科学技術賞、紫綬褒章受賞(章)。中央環境審議会、国土審議会、社会資本整備審議会委員、釧路湿原自然再生協議会会長を務める。

講演の概要

通称“流域治水関連法”の附帯決議には「流域治水の取組においては、自然環境が有する多様な機能をいかすグリーンインフラの考え方を普及させ、災害リスクの低減に寄与する生態系の機能を積極的に保全又は再生することにより、生態系ネットワークの形成に貢献すること」と記されている。本講演では千歳川流域にある舞鶴遊水地を例に、気候変動下におけるグリーンインフラの役割、そして石狩川流域への展開について述べる。

〈講演・1〉泥炭原野開拓の大志 ～北海道農業の基盤をつくった農業土木～



長澤 徹明 (ナガサワ テツアキ)

北海道大学 名誉教授
NPO篠津泥炭農地環境保全の会 理事長
農業農村工学会 名誉会員
日本農業工学会 フェロー

講演の概要

明治以降の拓地殖民は、概ね条件の良い土地から始められたため、首府に近いにもかかわらず、洪水常習の泥炭湿地であった石狩川下流地帯はながく放置された。たとえば、篠津原野は、明治中期から入植や排水路整備が行われたが成功せず、大正年間にようやく大排水路が掘削されたが、本格的な拓殖までには至らなかった。泥炭原野開拓の大志は、戦後の篠津地域総合開発事業により果たされ、原野排水と共に石狩川の利水にかかる農業土木技術が農業の基盤を築いた。

<講演・2> 北海道運河土木史における大友亀太郎

～北海道開拓と初期舟運～



山田 大隆 (ヤマダ ヒロタカ)

北海道産業考古学会 会長

日本産業技術史学会 理事

一般社団法人 建設イノベーション推進機構 特別顧問

北海道大学総合博物館 資料調査研究員

講演の概要

札幌市中心部条理型街区の由来が初代判官島義勇提言は有名だが、その基礎は、天側による大友亀太郎設計による大友堀（慶応2年）の南北部分である。詳細は2018年の北海道遺産第3回選定で解明された。大友堀は、幕藩時代在来舟運技術体系（測量法：伊能忠敬、運河土木技術：二宮尊徳）を継承して大友による導入で建設され、体系は道庁時代岡崎文吉の創成運河に継承された。今回は最近の研究成果と多数の未公開写真で大友の不朽の功績を考察する。

<講演・3> 先史の人々の水環境と暮らし

～水に恵まれた豊平川扇状地の遺跡の時代的変遷を中心として～



榊田 朋広 (サカキダ トモヒロ)

神奈川県生まれ、早稲田大学第一文学部総合人文学科卒業、東京大学大学院人文社会系研究科単位取得退学、博士（文学）

2009年より現職に就き、2016年に「擦文土器の研究」を出版、現在は札幌市内の遺跡に関する普及啓発に努める。

札幌市市民文化局文化財課 文化財調査員

講演の概要

札幌に最初に人が住んだのは今から約8千年前のことである。その時から、人々は海や川と密接にかかわりながら生きてきた。温暖化と寒冷化による海水面の上昇と下降。川が運ぶ砂礫や土砂の堆積と扇状地・氾濫原の形成。数千年の時をかけて変わる水環境に、人々はどのように向き合ってきたのか。札幌の都心部をのせる豊平川扇状地とその周辺で発見された先史時代の遺跡から、水環境と暮らしの実態に迫る。

※講師概要は、建設イノベーション推進機構WEBページで公開中 <https://www.ipac.or.jp/2022>